東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

スロヴァキアのエスニック集団の変化とロマの社会的状況（研究ノート）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加賀美,雅弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159230

学芸地理 75 号 2019 年 pp.16-25

スロヴァキアのエスニック集団の変化とロマの社会的状況

加賀美　雅弘*

キーワード：エスニック集団，スロヴァキア人，ハンガリー人，ロマ，スロヴァキア

Ⅰ　はじめに

1990年以降，かつて社会主義体制下にあったポーランド，チェコ，スロヴァキア，ハンガリーなどの中央ヨーロッパ諸国は，政治や経済，社会など多方面で大きな変化を遂げている．各国に居住するエスニック集団についても例外ではない．東西冷戦構造の崩壊，中央ヨーロッパ諸国のEU加盟，それに伴う国境の移動の自由化によって中央ヨーロッパ諸国には外国人が大量に流入し，とりわけ都市において既存の社会との摩擦や軋轢など共生に向けて大きな課題が提起されている．EU加盟国としてエスニック集団保護のための政策が実施される一方で，アファーマティブ・アクションに対する一般市民の反発も無視できない規模に達しており，右派勢力の躍進，極右政党の台頭なども注意すべき点である（加賀美ほか，2014）．一方，エスニック集団の居住地をはじめ，彼らの居住地の景観や居住形態，社会組織などには大きな変化があらわれている．

筆者はすでにオーストリアやハンガリーにおけるエスニック集団に関する一連の調査をとおして，彼らの動向が集団ごとに大きく異なること，彼らの社会経済的状況がそれぞれの国内の地域間格差に対応することを明らかにしてきた（加賀美, 2007a, 加賀美, 2007b, 加賀美, 2012），そこで本稿では，中央ヨーロッパの一国であるスロヴァキアのエスニック集団に視点を当て，彼らの変化と分布，ならびにエスニック集団であるロマの特色についての検討を試みる．

なお，この小論をまとめるにあたり，科学研究費　基盤研究（B）（海外学術調査）「EU統合に伴う中央ヨーロッパの都市再生プロセスとエスニック集団」（研究代表者：加賀美雅弘，課題番号：18401002）において，故小林浩二岐阜大学名誉教授による報告書をベースとして盛り込んだ．報告が出されてからすでに時間が経過しており，しかも小林自身によるスロヴァキアについての調査および考察結果もある（小林ほか，2008）が，広く東ヨーロッパで精力的な調査をされた小林の未公開の成果に手を加えて公表する意義を感じたので，ここに取りまとめた．本文中，人口は一部を除いて概数で示した．

Ⅱ　スロヴァキアのエスニック集団とその変化

スロヴァキアのエスニック集団の人口の推移は，かつてハンガリー王国領内にあった1880年までさかのぼることができる．ただし，統計によって民族の定義方法や人口の集計方法が異

* 東京学芸大学教育学部

なっており，単純に比較できないことに注意を要する．たとえば，ほとんどのセンサスは自己申告によって集計されているが，母語によって民族を規定する方法もとられていた．また，1960年以降はResident population（登録地人口）に基づいているが，それ以前はPresent-in area population（居住地人口）が集計されていた（Mládek et al., 2006）．

１．1880年から第一次世界大戦までの変化

スロヴァキアのエスニック集団の動向は，19世紀後半以降，ハンガリー王国の時代から今日までセンサスデータによってたどることができる．ハンガリー王国領だった1880年には，今日のスロヴァキア領内においてスロヴァキア人149万人が最も多く，総人口の61.2％を占めていた．スロヴァキア人に次いで多かったのはハンガリー人で54.0万人（22.2％）であり，主にスロヴァキア南部に居住していた．さらにドイツ人が22.2万人（9.1％）であり，また，西端の都市ポジョニPozsony（現在の首都ブラティスラヴァ Bratislava）には歴代のハンガリー国王が戴冠式を行った歴史があり，数世代にわたって居住してきたハンガリー人の家族も多かった．ルテニア人（ウクライナ西部に居住するウクライナ人）は現在のウクライナ国境に近いスロヴァキア東部に居住していたが，その割合はわずか3.2％にすぎなかった．そのほかに若干のクロアチア人も居住していた．

1910年になるとハンガリー人は54.0万人から88.5万人へと著しく増加し，スロヴァキア総人口の30.3％に達した．これは，当時ハンガリー王国内で実施されていたマジャール化（ハンガリー化）政策によるものであった。当時，ハンガリー王国はオーストリア・ハンガリー王国を構成しており，1867年にハンガリー王国が成立して大幅に自治を獲得して以来，徹底したマジャール化政策が進められた．ハンガリー語の強制をはじめ，文学や芸術など幅広くハンガリー文化を強調し，個々の民族の文化を抑え込む政策とともに進行した．その結果，以前は他の民族と表明した人の多くがハンガリー人と表明するようになった．特に当時，ユダヤ人は公式の民族として認められていなかったため，彼らの多くは政策に応じて自らをハンガリー人として申告した（Kocsis, 2005）．

これに対して，スロヴァキア人は168.5万人へと増加した．ただし，総人口の伸びに及ばず，人口比は61.2％から57.7％へと減少した．一方，ドイツ人は1880年の21.2万人から19.9万人，9.1％から6.8％に減少した．他方，ルテニア人は他の民族と比べると出生率が高いことから，同じ期間に7.9万人（3.2％）から9.7万人（3.4％）へと若干増加した．

２．第一次世界大戦後から第二次世界大戦終了時までの変化

第一次世界大戦後，1918年にチェコスロヴァキアが成立したことによって，スロヴァキアのエスニック構造には大きな変化が生じた．

チェコスロヴァキアの領土は，大戦後のオーストリアの領土を規定したサン＝ジェルマン条約（1919年）と，ハンガリーの領土を定めたトリアノン条約（2020年）によって確定された．その際，チェコスロヴァキアは中世ボヘミア王国の領域を正当な領土として主張し，また政治的な安定・強化を図るために要求したドナウ川北岸の地域が領土として承認され，ほぼ現在の国土を確保することになった．なお，最終的には第二次世界大戦後のパリ平和条約（1947年）によってブラティスラヴァ南方の地域「ブラティスラヴァ橋頭堡Bratislava Bridgehead」がハンガリーからチェコスロヴァキアに移された結果，現在の国境線が確定されている．

その結果，スロヴァキア領内，特にハンガリーに近い南部には，多くのハンガリー人が居住する地域が組み込まれる結果となった．彼らエスニック集団に対して，当時のチェコスロヴァキア政府は，彼らの利益を保護するために政治的平等を保証し，母語の尊重とともに母語による教育の機会を確保し，エスニック文化を世代間で継承できるような制度の確保を義務づけた．

それにもかかわらず，センサスデータには1910年から1930年にかけてハンガリー人人口が著しく減少したことが読み取れる．1921年においては，スロヴァキアに居住するハンガリー人は65.1万人，その割合は21.7％であったが，1930年になると57.2万人（17.2％）になった．ハンガリー人の減少は，出生率の減少とともに，国家の新しい組織や法律の制定のもとで，ハンガリー人がスロヴァキア領土内から他の地域へ移動したことによるものであった．

一方，ドイツ人も敗戦による帝国の崩壊によってドイツやオーストリアに転出する者が多く，1930年には148.2万人で，総人口に占める割合は4.5％となった．中世の東方植民以来，ブラティスラヴァをはじめ多くの都市に分布していたほか，スロヴァキア中部のスピシュ Spiš（ドイツ語でZips）地方にはカルパチアドイツ人が多く居住していたが，この時期に人口規模が縮小した（Kocsis, 2005）．このほかルテニア人は1921年から1930年にかけて8.9万人から9.1万人へと若干増加したが，割合は3.0％から2.7％へと減少した．

ユダヤ人とロマは，チェコスロヴァキアの時代になって初めてセンサスに登場してくる．彼らは長くヨーロッパの民族集団として認められてこなかったが，第一次世界大戦後の民族自決の動きが強まるにつれてチェコスロヴァキアでも民族集団としてみなされるようになり，統計項目に定められたのである．1930年のセンサスには，現在のスロヴァキア領内において，ユダヤ人7.2万人，ロマ3.1万人が記録された．

なお，スロヴァキア人は1921年に195.2万人，その割合は65.1％であったが，1930年には133.8万人，70.4％に増加した．またチェコ人も，7.3万人（2.4％）から12.2万人（3.7％）になっている．

大戦後，チェコスロヴァキアに多くのハンガリー人が居住する地域が帰属にしたことから，ハンガリーでは右翼政党が中心になってそれらの地域を取り戻す運動が激化した．その要求はやがてナチスドイツとの連携へと発展する．そしてナチスドイツが主導したミュンヘン協定（1938年）によって，ハンガリーはスロヴァキア南部のハンガリー人居住地域をハンガリーに併合することに成功してゆく．これによってスロヴァキアは85万の人口を失った．その数は当時のチェコスロヴァキアの人口のほぼ3分の1に相当する．一方，この地域以外に住む4.5万人のハンガリー人はスロヴァキア領土内にとどまることになった．

一方，スロヴァキアでは，1939年にナチスドイツの後ろ盾を得てスロヴァキア共和国が独立を宣言した．スロヴァキア人の国家を目指す政府は，ナチスドイツと同様に一民族による国家を目指し，国内にいるエスニック集団の排除に乗り出し，7万人ものユダヤ人をはじめ，多数のロマを積極的に強制収容所に移送するなど非人道的な政策を実行した．特に1942年には国内に住むユダヤ人の強制収容所への受け入れを求め，1人当たり500ライヒスマルクをドイツ政府に支払い，その年だけで57,628人を強制的に移送した（Perfler, 2017）．スロヴァキア国籍をもつ自国民を排除したこの政策は，スロヴァキアの歴史の汚点として今に語り継がれている．

３．第二次世界大戦後から1989年までの変化

第二次世界大戦後，スロヴァキアがチェコスロヴァキアに復帰すると，チェコスロヴァキア政府は新しい国づくりの一環として大規模な人口移動を推し進めた．

まず着手したのが，国内に住むドイツ人およびハンガリー人の国外への追放だった．国内西部のチェコにおいては，ドイツおよびオーストリア国境に近い地域に中世以来ドイツ人が居住してきたが，これがドイツの侵略を招いたとして，チェコスロヴァキア政府は1946年にベネシュ布告を発布し，これによっておよそ300万人ものドイツ人が国外に追放された．とりわけ多くのドイツ人が集住していたドイツとの国境地域（大戦中ズデーテン地方としてドイツに併合されていた地域）では，住民のほとんどが国外に強制移動された．彼らはほとんどの財産を持ち出すことを禁じられたため，住宅や農場，工場や商店がそのまま残され，ここにスロヴァキア人が再移住させられた．また，近隣のウクライナやユーゴスラヴィア，ブルガリア，ルーマニアからチェコスロヴァキアに帰還したスロヴァキア人の多くも，これらの地域を新しい居住地として指定され，移動した（Kocsis, 2005）．

このほか東部のスロヴァキアでも，ドイツ人（特にカルパチアドイツ人）のほとんどが国外に追放された．ハンガリー人も市民権の停止と財産の没収が進められたため，スロヴァキアからハンガリーに帰還する者が続出した．ただし，ハンガリーはチェコスロヴァキアと同じ社会主義国であったことから，ハンガリー人の強制的な追放の規模は小さく，国外への流出の多くは自発的なものであった．

こうした大戦直後の変化は1950年のセンサスにも反映されている．1930年から1950年にかけて，ドイツ人とハンガリー人がいずれも大きく減少している．追放を免れた人々はその後も国内に残り，市民権の回復を得て居住を続けた．人口規模に大きな変化はなく，1980年までドイツ人は5万人前後で総人口の0.1 ～ 0.2%，ハンガリー人はほぼ55万人前後，総人口の10～12%であり続けた．

この間，エスニック集団の多くは，スロヴァキア語の習得やスロヴァキア人との婚姻などに伴って急速にスロヴァキア人に同化する傾向をたどった．これは小規模な居住形態を示す集団に特に顕著にあらわれた．たとえばルテニア人は1950年の人口は4.8万で総人口の1.2%となり，1930年よりも大幅に縮小した．さらに1980年には3.9万人（0.8%）になっている．

最後にユダヤ人とロマに触れておこう．第二次世界大戦後，多くのユダヤ人が先に亡命した人々を追ってアメリカ合衆国に流出した．また，1948年にイスラエルが建国すると，パレスチナに向けた移住もかなりの規模に及んだ．その結果，スロヴァキア領内のユダヤ人人口は大きく減少した．

一方，ロマは1950年代に放浪禁止令がだされ，移動生活を制限し，定住化を強制されたため，各地で多くのロマが意に反する住宅への居住を強いられた．これによって近隣からの差別や排斥の圧力を受けることが増えたことから，彼らのなかには農村地域に逃亡する者が続出し，空き家の不法占拠が横行した．ドイツ人やハンガリー人の追放によって廃村化した場所を居住地とする人々も目立った（加賀美, 2005）．彼らの居住環境は著しく劣悪で，独自の生活規範を維持しながら，低い生活水準のもと，教育や衛生の水準が低い集団が多くみられた．女子の地位が低いことから多くの子どもを出産するのが一般的であり，人口は増加の傾向を示した．

４．1989年以降の変化

チェコスロヴァキアは1989年に他の社会主義

国と同様，政治改革を進め，社会主義体制の崩壊とともに自由主義の世界へと転換した．これに伴って人権の強調，移動や経済活動の自由化が進み，エスニック集団は自身の存在をアピールするようになった．1991年のスロヴァキアのセンサスには，スロヴァキア人451.9万人（85.7％）をはじめ，ハンガリー人57.7万人（10.8％），チェコ人5.3万人（1.0％），ルテニア人3.0万人（0.6％），ドイツ人0.5万人（0.1％），さらにロマ，モラヴィア人，ポーランド人，ロシア人などのエスニック集団があげられた．

これを1980年の人口と比較すると，スロヴァキア人，ハンガリー人，ポーランド人，ドイツ人が増加した．これはいずれも彼らの民族意識が高まったことによるとされている．社会主義時代に民族的な特性を示すことが望まれていなかった反動として，自身の存在をアピールする風潮があらわれてきたことが，人口の増加に反映された．これは旧社会主義諸国にほぼ共通して見られた現象であり，そのもっともはげしい運動がユーゴスラヴィアの解体プロセスにあらわれた（加賀美，2012）．

ロマについては，1991年のセンサスでは7.6万人（1.5％）となっている．ただし，この数値は実際の人口とはかけ離れたものとされ，現実を反映したものとはみなされていない．それは人口調査が自己申告に基づいており，彼らの多くが自らをロマとして申告しないからである．長く差別されていたロマの多くは，自身を申告することによるメリットを感じていない．第二次世界大戦中，国勢調査の個票にロマと記載した人々が強制収容所に連行されたことから，自身を表明することにきわめて消極的であることが理由とされている（ヨルダン，2005）．

こうした実情から，ヨーロッパの多くの国ではロマの推定人口が出されている．これはロマ自身による申告ではなく，集落ごとにロマ人口に関する調査が依頼され，それを集計したものである．一般的には推定値が実際の人口に近いと考えられている．たとえば1997年には総人口5,356,207人に対して，ロマは83,988人（1.6％）だったが，推定人口は45.8～52.0万人（8.6～9.7％）に及んでおり，数値には大きな隔たりが見られる（加賀美，2005：29）．なお，2011年センサスにおけるロマ人口は105,738人（1.9％）であり，センサスデータにおいて人口が急激に増加していることが示されている．

2001年になるとスロヴァキア人，チェコ人，ロマが増加し，ハンガリー人，ルテニア人，ドイツ人は減少した．スロヴァキア人への同化が進んでいること，ロマの出生率が依然として高いことによると考えられる．それぞれの人口と，スロヴァキア総人口に占める割合は以下のとおりである．スロヴァキア人461.5万人（85.8％），ハンガリー人52.1万人（9.7％），ロマ9.3万人（1.7％），チェコ人4.5万人（0.8％），ルテニア人3.5万人（0.6％），ドイツ人0.5万人（0.1％）．さらに2006年にはスロヴァキア人461.4万人（85.4％），ハンガリー人51.4万人（9.5％），ロマ10.2万人（1.9％），チェコ人5.0万人（0.9％），ルテニア人3.6万人（0.6％），ドイツ人0.7万人（0.1％）へと変化している．

Ⅲ　スロヴァキアのエスニック集団の分布

前述したように，スロヴァキアの多様な民族構成は数世紀に及ぶ過程を経て形成されてきた．その結果，スロヴァキアのエスニック集団の分布は地域的にとらえることができる．

スロヴァキア北部および中央部ではスロヴァキア人としてのアイデンティティをもつ人々が多数を占めてきたのに対して，南部のハンガリーとの国境地域は，10世紀以来，スロヴァキアとともにハンガリー人が居住してきた（写真1）．また，

写真１　スロヴァキア南部の都市コマールノにおける道路名表記（2018年）
現在は少数民族保護のため，スロヴァキア語とともにハンガリー語が併記されている．

スロヴァキア東部ではスロヴァキア人とルテニア人が混住してきた．さらに，中世にはドイツ人の入植が各地で見られたほか，チェコ人やポーランド人など，近隣の人々との混住もなされた．ロマについての記録はほとんどないが，近代以降，スロヴァキア東部を中心にしてほぼ全域に分散して居住してきた．

スロヴァキアにおける民族の分布を概観しておこう．スロヴァキア人は，スロヴァキア全土にわたって広範に分布している．とりわけ首都ブラティスラヴァをはじめ，プレショフPrešovやトレンチーンTrenčín，ジリナŽilinaの人口のほとんどがスロヴァキア人である．

ハンガリー人は，ハンガリーとの国境地帯に帯状に分布している．これを地区Okres別に見ると，ドゥナイスカー・ストレダDunajská Stredaでは83.3％，コマールノKomárnoでは69.1％をハンガリー人が占めており，ハンガリー人社会が維持されている．

ロマはスロヴァキア全土に分布しているが，おおよそ西部から東部へ向かって増加する傾向にある．スロヴァキア東部ではロマの人口が多く，総人口に占める割合も高くなっている．東部にあるスロヴァキア第二の都市コシツェKosiceに多くのロマが暮らすほか，ロマが５％以上を占める地区にはケジマロクKežmarok，レヴォチャ Levoca，ヴラノフ・ナド・トプロウ Vranov nad Topľou，ゲルニツァ Gelnica，レヴーチャ Revuča，サビノフAbinov，スピシスカー・ノヴァー・ヴェスSpišská Nová Ves，コシツェ・オコリエKošice-okolieがある．また，バンスカー・ビストリツァ Banská Bystricaとリプトフスキー・ミクラーシュ Liptovský Mikuláš の地区では1.5％を超えている．

チェコ人は，特にチェコとの国境地域に多く居住している．スカリツァ Scalica，トレンチーン，ノヴェー・メスト・ナド・ヴァーホム Nové Mesto nad Vahom，ミヤヴァ Miyjava，イラヴァ Ilava，ピエシュチャニPiešťany，セニツァ Senicaなどの地区である．しかし，これらのどの地区でもチェコ人の割合は3％を超えることはない．このほかブラティスラヴァやコシツェ，バンスカー・ビストリッツァ，ジリナなどの都市にも多く居住している．また，伝統的にリプトフスキー・ミクラーシュやマルティンMartinなどにも多い．

ルテニア人はスロヴァキア東部に集中している．10％以上を有する地区はメジラボルツェ Medzilaborceで，そこではルテニア人の割合は40.4％にも達している．スヴィドニークSvidníkでは，ルテニア人の割合は10.5％である。スニナSninaでは8.8％である．これらの地区はポーランドとの国境に位置している．彼らの多くは何世代もの長い居住歴をもち，政治的枠組みの変化を乗り越えて住み続けている．

Ⅳ　スロヴァキアにおけるロマの特色

次に，スロヴァキアにおけるロマの特色について若干検討しよう．たとえば2002～2007年におけるエスニック集団ごとに人口の変化を見てみると，ロマの増加が特に著しい．2002年には

9.3万人だったのが，2007年には10.2万人に増加し，その割合も1.7％から1.9％に増加した．これは高い出生率によるものである．

その一方で，ロマの多くの生活水準がスロヴァキア国内において著しく低いことも挙げなければならない．一般にロマの家庭は多くの子どもを抱え，劣悪な居住環境のもとで生活している．多産多死であり，とりわけ乳児の死亡率がきわめて高い．こうした状況は人口ピラミッドに明確にあらわれており，スロヴァキア人やハンガリー人のそれと著しく異なっている．

現地で得た資料に家族が写っている1枚の写真がある．その写真には次のような説明がなされている．「スロヴァキアの町クロムパヒイKrompachyに住むロマの女性．年齢22歳で8人の子どもがある．彼女の家族はガスも飲料水も電気もない家に住んでいる．」

すでに述べたように，ロマはスロヴァキア東部に多く分布している．地区レベルでは，ロマの占める割合は多いところで5％程度であるが，市町村レベルでは50％を超えるところもある．とりわけロマが多く暮らすのは，人口200～2,600人の小さな農村集落である．東部の都市ポプラドPopradの周辺には，ロモニツカLomonička，ユルスケーJurske，ストラーネ・ポド・タトラミStráne pod Tatrami，ヴィーボルナーVýborna，ラクーシイRakúsy，ホルムニツァHolmnicaなど，ロマが多く居住する集落が分布している．ロマがスロヴァキア東部，特に農村に多く居住している理由として，次の点があげられる．東部地域では国と地方の行政が十分に機能しておらず，ロマにとっては安全だったこと，こうした状況はとりわけ農村に当てはまること，また農村には，ロマの住処となる放棄された集落や家屋，さらには食物が多く存在していたことである．

ロマにとって最も深刻な問題は，スロヴァキア社会から疎外された存在となっていることである．ロマはたいていスロヴァキア人の居住する集落の端，もしくは集落から若干離れたところにコロニーをつくって居住しているが，こうした状況はロマが置かれた環境を端的に物語っている．また，(1) 学歴が低く，小学校さえ出ていないロマが多数存在すること，(2) ロマのほとんどが失業者同然であること，(3) 劣悪な居住環境の下での生活を強いられていることなども，ロマがスロヴァキアの社会に融合していないことを明瞭に示すものである．

ポプラドとその周辺に居住するロマについて，2008年夏にスロヴァキアにおいて現地調査を行った小林は，以下のような状況や光景が印象に残ったと報告している．

ロマの集落の多くは，河川に沿った場所に孤立して立地している．集落は家屋をはじめ，電気や上下水道などのインフラが劣悪な状態にある．集落付近の河川は汚濁しており，あたりに散在するゴミのヤマが異臭を放っている．ロマの集落に近づくと，子どもたちがモノ乞いのために群れをなして近づいて来る（写真2）．また，最も深刻なのは，多くのスロヴァキア人がロマに対して嫌悪感を抱いていることである．

写真2　ポプラド付近のロマの集落（2002年，小林浩二撮影）
粗末な木造の家屋が並んでおり，外見からもロマの住宅だとわかる．

たとえば行政当局者の次のような言動がある．「ロマへの財政援助ですか．子どもの養育費をあげてもすぐに使ってしまうのですから，なす術がありません．彼らにはお金を貯めるという観念がないのですよ．」「援助をしても，その甲斐がありませんね．住宅を建ててやると，やがて仲間がやってきて一緒に住みついてしまう．そうするすぐに汚して不衛生な状況になる．そのせいか住宅はいつの間にか壊れており，とても普通の暮らしはできそうにない．要するに財政援助をしても無駄になってしまうのですよ．」．ロマに対するネガティヴな感情をもつスロヴァキア人が予想以上に多いのを知って驚き，問題解決の難しさを痛感した．スロヴァキア人が減少をたどる一方で，ロマは出生率がきわめて高く，人口増加を示していることが，こうした感情に輪をかけているといえよう．

その一方で，スロヴァキア社会に堅実に根を下ろしているロマが増加しつつあることも事実である．たとえば，ポプラドでは官庁や会社に就職し，重要な役割を担っている幾人かのロマに会うことができた．彼らロマたちはまた，スロヴァキア人との橋渡し役を演じているという点でキーパーソンの役割を果たしている（写真3）．

写真３　ヴェルキー・スラフコフVeľky Slavkovに住むロマの家族（2002年，小林浩二撮影）
このロマの家族はポプラドに職を得ており，スロヴァキア社会に融合している例とみなすことができる．

しかし残念ながら，こうしたロマはまだまだ少ないのが現状である．

きわめて貧困な状況にあって，スロヴァキア社会から孤立するロマの人々が多数いる一方で，すべてのロマがこのような状況にあるわけでない点にも目を向ける必要がある．実際，たとえば西部の都市ニトラNitraにある教育大学にはロマ研究科が設置され，ロマ語やロマの生活・文化に関する研究・教育がなされている．また，コシツェには1990年にロマのための芸術学校が開設され，ロマの歴史や文化を題材にした劇やダンスの習得・普及がなされている（滝口，2007）．こうしてスロヴァキア人社会に融合したロマは，スロヴァキア人社会から孤立したロマに比べて出生率がはるかに低い．同じロマでも再生産行動には大きな違いがある（Šprocha, 2007）．この事実は，ロマをスロヴァキア社会に統合していくうえできわめて重要である．

ロマの社会的な統合に向けた政策が，スロヴァキアを含むEU加盟国で積極的に行われている．とりわけロマの子どものための教育には力が入れられている．また今後はさらに，ロマにとって必要な法の整備（彼らの権利の保証や政治への参加など）を積極的に行うことも必要であろう．

同時に，ロマに対する偏見や敵意，差別をなくす前提として，スロヴァキア人がロマの特質を理解することも欠かせない課題である．多くのロマをかかえるスロヴァキアの取り組みが，ロマ問題に直面するEUの先導的役割を果たすものと期待されている．

Ⅴ　おわりに

本稿ではスロヴァキアのエスニック集団の動

向を概観しつつ，スロヴァキア人，ハンガリー人に次ぐ人口規模をもつロマの現状を見ながら，若干の考察を試みた．

スロヴァキアでは，ハンガリー王国時代の19世紀後半以来，スロヴァキア・ナショナリズムの高揚とともに，スロヴァキア語をはじめ伝統文化を共有したスロヴァキア人の形成と維持・拡大が強く求められてきた．それは第一次世界大戦後のチェコスロヴァキア国家の独立によってある程度は実現されたが，最終的な達成は1993年のスロヴァキア国家独立まで待たねばならなかった．

独立を果たしたことにより，スロヴァキア政府は主権国家としての安定した繁栄を求めて積極的な経済の発展，良好な国際関係の構築を追求した．2004年のEU加盟，2009年のユーロ導入は，スロヴァキアの政治的，経済的安定を確実なものにしたかに見える．

他方，国内のエスニック集団はスロヴァキアの発展に影を落としている．南部に集中して分布するハンガリー人をめぐって，隣国ハンガリーとの関係は必ずしも安定してはいない．また，きわめて生活水準の低いロマが多く住む東部地域の経済の停滞についても，抜本的な改善策がいまだ見出されていない状況にある．

もちろん，彼らを取り巻くこうした現実は，スロヴァキアだけでなくEU加盟国にあてはまる．とりわけ2004年のEU拡大以降，東ヨーロッパ諸国からフランスやイタリアなどヨーロッパの中心地域に移動するロマが急増しており，移動先でロマに対する抵抗や排除の動きが目立っている．ロマをそれぞれの国の社会に統合する努力を辛抱強く行う必要がある（加賀美，2005：315–345）．

2015年以降，シリアなど中東から多数の難民が流入すると，EUは加盟各国に対して受入数の割り当て策を講じた．スロヴァキアはこれに強く反発し，受け入れを固辞した．そこには，彼らを支援するための経済的な負担が大きすぎるという理由だけでなく，スロヴァキア人国家に流入する異民族に対する抵抗意識があることも否定できない．

エスニック集団をめぐるスロヴァキアの事情は，決してこの国だけに限られるものではない．スロヴァキアで起こっていることは，EUそしてヨーロッパの議論に広がりうる（増根，2012）．EU加盟国のロマの動向についても，EU各国ならびにEUの民族政策との関連で注意深く追っていくことが求められている．

付記

本稿の作成には，科学研究費 基盤研究（B）（海外学術調査）「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘，課題番号：17H04536）の一部を使用した．この小論を小林浩二教授の霊にささげます．

参考文献

加賀美雅弘編著（2005）：『「ジプシー」と呼ばれた人々―東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在―』学文社，347+6p.

加賀美雅弘（2007a）：民族集団と文化．加賀美雅弘・木村汎編『東ヨーロッパ・ロシア（朝倉世界地理講座10）』朝倉書店，pp.97–108.

加賀美雅弘（2007b）：EU統合に伴う東ヨーロッパの都市市街地の変化―ハンガリー・ブダペストの市街地再開発―．小林浩二・呉羽正昭編著『EU拡大と新しいヨーロッパ』原書房，pp.1–16.

加賀美雅弘（2012）：EU統合のなかでの国民国家とエスニック集団―ユーゴ解体にみるEU

の将来―．小林浩二・大関泰宏編著『拡大EUとニューリージョン』原書房，pp.2-14.
加賀美雅弘・川手圭一・久邇良子（2014）：『ヨーロッパ学への招待―地理・歴史・政治からみたヨーロッパ―，第二版』学文社，242p.
小林浩二・小林月子・大関泰宏編著（2008）：『激動するスロヴァキアと日本―家族・暮らし・人口―』二宮書店，175p.
滝口幸子（2007）：少数民族ロマの変化．加賀美雅弘・木村汎編『東ヨーロッパ・ロシア（朝倉世界地理講座10）』朝倉書店，pp.118-125.
増根正悟（2012）：スロヴァキアのロマ（“リトル・ビッグ・カントリー”スロヴァキア留学記⑤）．地理，60(3)，pp.56-62.
ヨルダン，P.(2005)：東ヨーロッパのロマ民族の居住分布．加賀美雅弘編著『「ジプシー」と呼ばれた人々―東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在―』学文社，pp.57-95.
Kocsis, K.（2005）: *South Eastern Europe in maps*. Budapest: Kossuth Publishing.
Mládek, J., Kusendová, D., Marenchakova, J., Podolák, P. and Vaňo, B. ed.(2006): *Demographical analysis of Slovakia*. Bratislava: Comenius University.
Perfler, S.（2017）: Antisemitismus in der Slowakei. *David*, 76　http://david.juden.at/2008/76/16_perfler.htm（最終閲覧日：2019年11月4日）
Šprocha, B.（2007）: Difference in fertility rates of Roma families in Slovakia in relation to the level of integration. *Slovenská Štatistika A Demografia*, 1-2, pp.141-149.

Transition of Ethnic Groups and Social Situation of Roma in Slovakia

KAGAMI Masahiro*

Keywords：ethnic group, Slovaks, Hungarians, Roma, Slovakia

*Department of Geography, Tokyo Gakugei University